

制作プロセス / 八重畳

最下部の台畳はまず角を出し、寸法を決め、強度を保つために^{かまちいた}框板を入れます。この板を上下縫い締めることによって、藁が締まり、板によって寸法がきれいに出来ます。この際、足で上下の板を締めるのですが、ただ締めるだけではなく、均等に厚みをもたせて板を藁床に落とし込みます。また、長年の使用に耐えられるように、框板上と下の板の間の寸法に切り、柱として四隅と中に入れる。少しでもずれて直角を保てなかったり、厚みが合わなかったりすると仕上がりに大きく影響します。この台畳の造作は最も重要です。

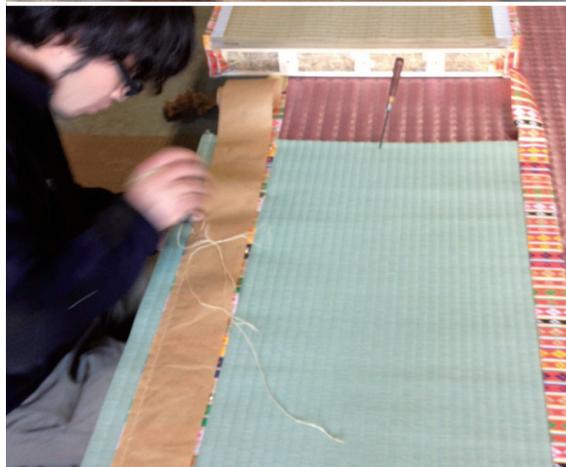
台畳の上に重ねる6枚の御座は、寸法を出す際、6枚全部を完璧に揃えなければ模様不揃いになります。単純なようですが高度な技を要する難しい作業です。御座1枚1枚に緑の紋様を1分ずつずらし縫いつけていきます。八重畳の造作の見せ場です。

生地も薄く、縫い跡が目立ちやすい^{うんげんべり}縹縹縁。上御座に縁をつけ、台畳の上に重ねた6枚の御座に被せず。裏で縫い留め、仕上げに曲がり針と赤い綿糸で紋様を縫い合わせます。違和感なく自然に仕上げるのが最大のポイント。縹縹縁は最も格の高い畳縁です。

三宅 克伺

1983年種子島生まれ。京都で育つ。2001年堀井畳商店就職。2006年株式会社にしむらに転職。同年京都畳技術専門学院入学。2009年同校卒業。2014年「京もの認定工芸士」認定。

〒606-8101
京都市左京区高野夢原町75 Studio ZERO WATT
TEL.090-6969-5476 FAX.075-761-8799
Eメール rituu@softbank.ne.jp



現代は何を製造するにも機械が主流ですが、「畳一帖をいかに美しく手で縫い上げるか」、単純なようですが最終ゴールはないといつていいこの命題に真摯に取り組んでいます。そのため、伝統技術はもとより、い草の生息環境など素材の探求もしていきたいと思っています。畳は人が素手、素足で触れるものであり、その温もり、冷んやり感、乾き具合で四季や天候を感じられるよう五感で楽しむ一帖づくりを努めていきたいです。

畳の冷たさ、温かさ
五感で楽しむ一帖を



京もの認定工芸士 第103号

みやけ かつし
三宅 克伺